

令和7年9月14日（日）

岩倉市こどもまんなかアクション推進シンポジウム

小林よしひささんトークショー

司会者

さあ、それではこれよりは、小林よしひささんによるトークショーに入らせていただきます。皆さんご存知のように、NHK「お母さんといっしょ」で2005年から2019年までの間体操のお兄さんを務められた小林さんですが、なんと、在任期間は歴代最長の14年間に及びます。体操のお兄さんの中ではまさにレジェンドの存在でいらっしゃいます。そして、2022年からは、同じくNHKの「おはよ〜いどん」の体操のお兄さんとしてレギュラー出演もされていらっしゃいます。メディアでの活動以外にも、初代遊び庁長官や、東京造形大学で非常勤体育講師も務められていらっしゃいます。さらには、ワールドジムナストラダ世界体操祭の日本代表でもいらっしゃいます。まさに他方面で活躍されていらっしゃる小林さんです。それでは、早速お越しいたください。それでは小林よしひささん、よろしくお願いいたします。どうぞ拍手をお願いいたします。

小林 よしひさ

失礼します。よろしくお願いいたします。

司会者

さあ、まさに画面からもうそのまま出てきた。実はですね、先ほど来られた皆さんに、小林さんの印象を伺いました。「明るい」「元気」という印象をお持ちの方が多かったです。今も、もうそのままオーラが飛び出ています。

さあ、今日は愛知県までお越しいただきましたけれども、愛知県にお越しになることはありますか。

小林 よしひさ

結構ありまして、名古屋駅には月に何度か必ず来ているので、割と身近な場所という感覚でいます。

司会者

それは嬉しいですね。岩倉市はどうですか。

小林 よしひさ

岩倉市は多分初めてだと思います。

司会者

初めて来ていただいてありがとうございます。実はですね、岩倉市というのは愛知県で面積が一番小さいんです。日本でも10番目ぐらいに小さいんですけど、その分、皆さんが「暮らしやすい」と言ってくれるんです。

小林 よしひさ

名刺にも『いわくらしやすい』って書いてありますよね。

司会者

岩倉市はそのキャッチフレーズで皆さんに周知されているところなんですけれども、今日は、アットホームにトークショーを進めていけたらと思います。

ところで小林さん、実際、14年間「お母さんといっしょ」の番組に出てこられて、いかがだったんですか。14年間って、歴代でも一番長いですが。

小林 よしひさ

14年と考えると、もう本当に長いですよね。今も一応、体操のお兄さんとして活動しているんですが、今年で20年目になるんですね。なので、当時見ていた子が例えば0歳だったら、もう20歳になっているという状態なので、ものすごい時間、長く居たんだなと思うんです。けれども、結構1年1年、毎回新しいことに挑戦させてもらったり、新たな仕事があったり、新たな経験があったりというのが多かったので、自分としては、14年もやったみたいな感覚はあまりなくて、あっという間の14年間でした。

司会者

あっという間なんですね。

小林 よしひさ

あっという間でした。

司会者

でも0歳の子がもう14歳になっている。

小林 よしひさ

そうですね。

司会者

その14年間でやっぱり大変だなとか、印象に残ったことっていろいろあると思うんですけど。

小林 よしひさ

とにかくにも、番組でお兄さんになった時に言われたのも、やっぱり「体力が大事だよ」と言われておりまして。今はちょっと分かりませんが、当時は年間280本ぐらい番組を収録するんですね。それを毎年毎年やっていくわけなんですけど、私、14年間で1回も病欠したことがないので、健康でずっとやり続けるというのが大変でしたね。

司会者

一度も？

小林 よしひさ

一度もないです。

司会者

14 年間？

小林 よしひさ

皆勤賞しました。

司会者

すごいですね。その秘訣ってというのは、何かあったんですか。

小林 よしひさ

あまり意識はしてなかったんですけど、今でこそ手洗いうがいだとかマスクだというのがありましたけれども、その当時からも、手洗いうがいを徹底すること、それだけでしたけど、やっぱり大事でしたね。

司会者

基本が大事だと。

小林 よしひさ

基本が大事ですね。

司会者

なるほど。でも例えばですよ、ご自身でも 14 年間、子どもたちと関わってくると、何か変化っていうのはありましたか。例えば、当初こう思ってたことがなかなかうまくいかないこともあるでしょう。子どもたちっていうのは、ね、予想がつかないと思いますし。

小林 よしひさ

そうですね。でも、まず一番最初になった時に、収録、例えば、テレビのお仕事をしたこともありませんでしたし、実際に専門的に子どもたちに指導するみたいなこともしていなかったんで、一番最初は、本当にそこが自分の中でもスキルもなければ経験値もなかったんで、すごく大変だった 1 年でしたね、最初は。

ただ、自分の中で「体操のお兄さんとはこういうものだ」みたいなものが皆さんなんとなくあるじゃないですか。

司会者

イメージがあります。

小林 よしひさ

先ほども元気だ明るいだとかありましたよね。でも、それをちょっと追求しすぎている自分がいて。収録に来る子どもたちは、必ず毎回新しい、初めて出会う子たちで、40 人前後なんですけども。その子たちに何とかして楽しんで帰ってもらわなきゃという、ものすごいエネルギーで頑張ってたんですけど、なかなかうまくいかなかったんですね。

司会者

最初は、楽しんでもらおうと。

小林 よしひさ

もう必死に声をかけ、必死に動きやっていたんですけど、なんかうまくいなくて、これはどうなんだろうと想着いて。

そんな矢先、私にとっては、演技であったりとか舞台の立ち方だったりとか、そういったことを指導してくれている先生から、体操のお兄さんは私 11 代目なんですけども、今は 13 代目ですかね、「体操のお兄さんっていうのは、世の中にその時代にいたその人しかいないんだから、自分で考えなくて、小林よしひささん、あなたが体操のお兄さんなんだから、あなたが体操のお兄さんとして思ってやってみなさい」と言われまして。

司会者

常にありきじゃなくて。ご自身がということなんですね。

小林 よしひさ

もっと自分を出して、肩の力を抜いてやった方がいいですよということにも聞こえたんですね。

司会者

なるほど。

小林 よしひさ

で、収録にいざ臨んだ時に、ちょっと自分の中で俯瞰で収録を見れる感覚も余裕が出てきて。子どもたちの姿であったりとか、動きだったりとか。とりわけ感じたのは、子どもたちもしっかりと声を出してこちらにいろんなことをエネルギーを送ってくれている、ということに気がついたんですね。

司会者

なるほど。言葉では子どもってなかなか伝えられないけれど、何かしら表情とかアクションでは伝えてくれてるんだっていうのが分かったと。

小林 よしひさ

そうそう。エネルギーがビシビシ来てるのに、それを無視して勝手にこっちはエネルギー出して「わー」ってやってただけなので、頑張ってるんだけどコミュニケーション取れてないよねってことにも気がついて、ちょっと落ち着いて、出すだけじゃなくて受け取るっていうことも意識するようになったら、すごくコミュニケーションがうまく取れるようになって、収録も、ものすごくうまくいくようになってきて。

司会者

子育てにも少し通じますよね。

小林 よしひさ

そうなんですよ。私、娘が今小学校 1 年生、6 歳なんですけども、

司会者

1年生おめでとうございます。

小林 よしひさ

ありがとうございます。新1年生で。前半頑張りまして。でも、その子育てにも活かしているというか、何事も決めつけず、必ず娘には、ちゃんと物を聞くようにするっていう。何が好きって分かってたとしても、何がいい、何食べたいって。

司会者

親はある程度わかるんですよね。

小林 よしひさ

わかりますよね。

司会者

この子、これ好きかなっていうのは。

小林 よしひさ

そうそう。それを勝手にパパパってやるのではなくて。

司会者

でも、準備しちやいそうですよ。

小林 よしひさ

そうなんです。それをしないようにして、まずちゃんと意見を聞いて、本人が物事をチョイスして、選んで、自分で言葉にするっていうのをちょっと意識しようねって、夫婦間でも決めていて。あまり決め事はしてないんですけども。

司会者

あまり夫婦間で決め事はしてないんですか？

小林 よしひさ

あまりしてないんですけど、そこはちょっとお互いを感じていたことだし、自分が経験してきたことだったので、ちょっとこれでやっていこうねっていうのは、唯一ぐらいですね。

司会者

なるほど。ちょっとあの自戒の念が込められてきました。ずらっと並べそうですね。

小林 よしひさ

もう、はい。あなたはこれですね。次はこうしてください。帰ってきたらこれです。っていうのを極力しないように。でも、かといって放置ではないんですけどね。ある程度の道を示してあげて。あなたは明日までに宿題をやらなきゃいけないよね、ご飯食べなきゃいけないよね、遊びたいよね。さあ、どうしますか？というところを、自分でちょっと動かすというか、自分の気持ちでチョイスさせるっていうことをしています。

司会者

でもないですか。「やりたくないの。」って言われること。

小林 よしひさ

はい、あります。そういうときは、「いいよ」って。「どうぞ」と言います。その代わり、明日大変なのはあなたですよねっていうことですから。

司会者

そこにはちゃんとあるわけですね。

小林 よしひさ

でもまだね、小さい頃多少それができていなかったり、忘れたり、まだ許される時期なので、それを経験して自分で失敗したら、「あ、やっぱこうしとけばよかったな」っていう失敗経験で、次の日逆に、「最初に宿題やったらあとはとっても楽しかった」っていう成功体験もつながると思うので、そういう経験をどんどん自分で選んでしてほしいなっていう感覚です。

司会者

なるほど。でも小林さん自身は子供の頃を思い出すと、どんな子だったんですか。

小林 よしひさ

私はもの静かで、泣き虫。

司会者

あれ、ちょっと予想と違いますよ。

小林 よしひさ

よく言われるんですけども、本当にもの静かで。姉が2人いたんですけども、末っ子長男という感じで、上もしかも離れていたんです。なので、すごく保護してもらっていた。いろいろやってもらっていたタイプではあったんですけども、逆に、親は共働きだったので、家に帰ったら自分で何でもかんでもやらないと物が進まない環境でもあったんですよね。

司会者

なるほど。子供の頃の夢ってどんなものをお持ちだったんですか？

小林 よしひさ

一番古い記憶で、幼稚園の年長さんの時に将来なりたいものとか夢を絵に描いてみましようというのがあったんですよね。それで私描いたのは忍者でした。

司会者

ちょっと待ってください。でも動くんですね。

小林 よしひさ

動く方でした。家にあった歴史の漫画みたいなものの後ろの方に「忍者とは」みたいな説明が書いてあって、それを見て「かっこいいな」っていうのが最初、忍者との出会いで。それを見てから、あと、当時映画で忍者の映画があったりとか、あとはジャッキーチェンだとかブルースリーだとか、ちょっと今の人だとなかなかあれかもしれませんが、そういうのも見て、体を動かしてアクションするっていうのがとっても好きになって、そういうのは外でずっとやってるような、そういう子供でした。

司会者

なるほど。体を動かすことは好きだったと。

小林 よしひさ

ものすごい好きでした。

司会者

この忍者から、どんな風に体操のお兄さんにな変わっていくんですか？

小林 よしひさ

まず体操と名付くものに最初に出会ったのは小学校の頃で、ただ体操教室っていうよりは運動遊び教室くらいの感覚のもので。

司会者

そこまでガチガチではなかったと。

小林 よしひさ

そうですね。プラス、剣道も始めて。どちらかという、もう中高は剣道部に入っていたので、体操の人生というよりは剣道部の人生がすごく長かったんですよ。

司会者

なるほど。

小林 よしひさ

剣道の試合で負けることで、当時まだ成長がちょっと遅めの方だったので。成長期スタートするのが。結構体も細くて身長も小さくて。

司会者

そうだったんですか。

小林 よしひさ

それでも勝ちたい。じゃあどうしたらいいんだろうって、いろんなトレーニングの仕方とか、他の武道のトレーニングの仕方とか、いろいろ自分で研究するようになって。その結果、剣道で勝つことよりも、体を鍛えることとか、そっちの方に興味を持つようになって。それで、大学を体育の大学の日本体育大学に進みましようという目標ができて、入学すると。そこでようやく体操部というのに大学から入るんですけども。

司会者

結構遅めじゃないですか。

小林 よしひさ

だいぶ遅いですね。ただこの体操部というのも、日本体育大学では体操競技部というのと体操部という2つあったんですね。これ何だろうと思って、体操競技部というのは、オリンピックで活躍されている皆さんいらっしゃいますけど、その競技性のある体操部。で、私が入った体操部というのは、競技性のない体操で、体操のことを自分で勉強して、技を磨いて、それを団体で形にして演技を見せるっていう競技性のない体操部だったんですね。

司会者

なるほど、そういうふうにな変わっていくんですね。

小林 よしひさ

競技はもういいなという気持ちもあったので、とても体も動かせるし、体のことも勉強できる部活っていうので、「今の自分にぴったりだ」と思って入部をしたんですけど、その先輩だったのが、子供の頃に通ってたその教室の先生が、その体操部の主審だったんですよね。

司会者

なるほど。

小林 よしひさ

そこで運命も感じ、そしてその体操部から「お母さんといっしょ」の体操のお兄さんっていうのが今13人いるわけなんですけど、大体4分の1はそこ出身なんです。

司会者

そうなんですね。

小林 よしひさ

それも入ってから知ったんですけども。すごいところに入ったなと。

司会者

だって、それを目指してくる方もいるわけじゃないですか。

小林 よしひさ

いたと思います。ただ、私はそうではなく、入って新入生歓迎会の時に、8代目体操のお兄さんの瀬戸口さんという方が、当時大学の講師もやっていたので、そこにいらっしゃっていて。それで初めて「いるんだ」というので知ったっていうぐらいだったので。

司会者

そうしてみると、ご自身の中の積み重ねとご縁とっていう巡り合わせが体操のお兄さんに。

小林 よしひさ

そうですね。しかも、その時に「じゃあ体操のお兄さん目指そう」と思ったかという、そうは思わずに、別に特に体操のお兄さんってのは、そういう人になるもんだっていう感覚だったので、体操のお兄さんは、当時は、全く自分の目標とか将来のなりたいものランキングにも入ってなかったんですね。

司会者

なるほど。

小林 よしひさ

私は、大学で体の鍛えることとか、それが基本ベースと、あと学校体育で教員の免許を取って、プラス社会体育と言われる、例えば地域に体育館があったり、運動できる施設があったりとか、そういったものをどのように活用するかとか、地域の高齢者の方だったり、子どもたちにどんなスポーツを提供できるか、みたいな勉強をしましたので、そういうお仕事を目指してたんですね。その後は。

司会者

じゃあ逆に今こういう仕事をされてらっしゃるっていうのは、よもや、子ども時代の小林くんは。

小林 よしひさ

全くないですし、どちらかという、真逆のことをしようとしていたので。皆さんのような、縁の下の力持ちのような仕事をしようと思っていたので、びっくりでしょうね。

司会者

やっぱりこう、なんて言うんでしょう。将来の夢っていうのは、変わってもくると。

小林 よしひさ

どんどん変わっていたと思いますし、あと、いろんなことを経験したり、それこそ成功したこと、失敗したことによって、新たな目標が生まれて、その目標からまた夢が生まれて、それがでも、じゃあバラバラだったかっていうと、意外にそうではなくて。

司会者

何かコツとかはあるんですか。

小林 よしひさ

自分の中でコツとしていることではないんですけども、ちょうど大学を卒業するときに、一応地方公務員の試験も受かってたんです。

司会者

あれ、ちょっと待ってください、公務員さんですか。

小林 よしひさ

はい。けども、大学の体操部の先生の方から、助手とコーチをやりませんかと誘いを受けて。ただ、これは期限付きで3年間。

司会者

なんか新しい選択が来ましたね。

小林 よしひさ

じゃあ、ちょっと遠回りしていろんな経験してから行ったらいいんじゃないかと。いつだっていいんじゃないかと思って入ったその1年後に、体操のお兄さんのオーディションの話が来るんですよね。

司会者

遠回りしてもいいかなっていう選択肢が、何かを引き寄せてくる。

小林 よしひさ

あとは、目標にただまっすぐ進むだけではなく、やっぱりいろんな経験。RPG ゲームとかって、アクションって横スクロールでどんどんと目標に向かっていく感じがありますけど、RPG って、目標があるけど、このボスを倒すために街の人の案件をクリアして何かの石をもらって、その石をこっちにあげると鍵をもらって、鍵を持つと洞窟に行けて、洞窟に行くとなんかすごいものが手に入って、それで武器作ってようやくボス、みたいなものがあるじゃないですか。人生も、何が自分の目標、夢に使える武器になるか、鍵になるか分からないので、どんどんとその引き出しだったり、鍵だったり、武器だったり、素材を手に入れるっていう作業がすごく大事なんじゃないかなってというのは、その時感じていて。

司会者

でも、実際その時には、それが武器になるとはよもや思わないじゃないですか。

小林 よしひさ

でも、それをどれだけ自分が用意してきて、いざその場面になった時にその引き出しがどれだけあるかが、夢をつかみ取る時のエネルギーになるというか。

司会者

出ました、引き出し。

小林 よしひさ

私、「セレンディピティ」という言葉を、その時、オーディション受かった後ぐらいに知ったんですけども、調べると、「自分が意図しない幸福が手に入ったこと」とか、あとは、「その意図しない幸福を手に入れる能力」みたいな風を書いてあるんですけど、よくわからないなと思って。でも、みんな平等にチャンスって訪れるかという、絶対訪れるわけじゃないじゃないですか。

司会者

チャンスってこうですからね。

小林 よしひさ

でも、そのいざチャンスが目の前に来た時につかみ取る能力があるかないかが、夢を実現できるかできないかの大きな差になってくると思うので、何が自分にとってプラスになるかわからないので、どんどんいろいろな経験をした方がいいんじゃないかなっていうのを、その時はっきりと感じました。

司会者

いろんな経験。なるほど。

ちょっとですね、先に皆さんからも伺ったので、聞いてみようかと思うんですけど、実はその経験の小林さんの中で、さっきお話にも出たんですけど、剣道、何年続けておられたんですか？

小林 よしひさ

剣道は、小学校の4年か5年くらいから高校卒業までです。

司会者

剣道のお兄さんじゃないですか。

小林 よしひさ

お兄さんになった時ってというのは、剣道歴のが長いので、剣道のお兄さんでしたね。

司会者

せっくなので、目の前のお母さんからもちょっと伺ったんです。小林さんが剣道をずっとやってこられたのを聞いて、途中で心が折れそうになったりとか、そういう時にどうクリアする秘訣っていうか、やっぱり親目線であるじゃないですか。

小林 よしひさ

結構序盤にありまして。それこそ、剣道を始めるきっかけっていうのが、ものすごい仲の良かった幼馴染が引っ越しをしてしまったんですけど、その子が剣道をやっていて、引っ越しをした彼とまた会うためには、剣道をやってれば会えるんじゃないかっていう理由で始めたので、最初はそんなに剣道に対して魅力を感じている状況ではなかったんですけど。まあ、臭い、痛い、寒ってマイナス面がいっぱい多いじゃないですか。それで、いつの日か、やっぱり挫折しそうになったのが夏休みの時で。みんなは休んでるのに、僕は剣道しに行かなきゃいけないっていうので、僕もちょっと休んでいいかなっていうのを母親にチラッと言ったら、母親はものすごいさっぱり「ダメだよ」って言って、「行ってらっしゃい」っていう。本当にたったそれだけだったんですけど。ああ、これは行かなきゃいけないものなんだと。そんなに強く言われたわけではないですが、あまりにもさっぱり言われたので、「そうなんだ、行くもんなんだ、これは。」と思って、行くようになって。その半年後ぐらいに、私は剣道を始めたのが遅い方だったんですけども、試合の時に、前から始めた子たちに勝って優勝することができたんですね。ただ、その子たちは結構夏休み休んでたので、「ああ、休まなかったから、僕は勝てたんだ」っていう、一つの成功体験を得て、そこから、もう、何だろう、挫折っていう感覚がなくなって。むしろ、どんどん勝っていくためにはどうするかっていうので、先ほどの高校までの話になっていくって感じでした。

司会者

なるほど。声かけとかもそうなんですけど、頑張れとかいろいろあると思うんですけど、普通に「じゃあ行ってらっしゃい」っていうのも、一つの親ならではの声かけになってくるのかもしれないね。

小林 よしひさ

きっと、ある意味対話してしまったら、親の隙も見てもこう言ったのかもしれないけど、全く隙を見せずに「行ってらっしゃい」って終わりっていう。「ああ、行ってきます」みたいな。それはかなり自分にとっては後押しになって。でも、続けることの大事さっていうのはそこですごく感じてたから、14 年間本当にいろんなことありましてし、大変でしたけども、本当に何もストレスなく続けるっていうことはできました。

司会者

ストレスなくっていうのがすごいですね。例えばですね、今いろんな選択肢があるじゃないですか。例えば、いろいろこれ続ける、続けないっていうのもあるんですけど。小林さんの話を伺っていると、続けることで何か見えてくるものっていうのも実際あるのかもって気がしますね。

小林 よしひさ

そうですね。何かそれを必ず極めなければならないと言われるとすごく大変かもしれないですけども、まず一つ的能力として、「続けられた」っていうことは、勝ち負けに問わず確実にできたという自分にとっての成功であったりとか、自分のスキル経験になっていくんじゃないかなっていうのは感じますね。

司会者

そうですね。続けてこれたっていうのが、多分一番の自信につながってくると思いますね。これは多分、周りの環境じゃなくて、本人が一番そうかもしれないですね。

小林 よしひさ

だと思います。あまりきっと周りは感じないと思いますけど、自分はずっとやり続けているっていうのはありますからね。

司会者

なるほど。もう一つ、とっても貴重な意見を伺いました。小林さん、先ほどから皆さんも感じていらっしゃると思うんですけど、テレビの中でもそうだったんですが、目を見てしゃべってくれる。

小林 よしひさ

目ですか。

司会者

「よしお兄さんは目を見て喋ってくれる。すごくそれが大好きでした」というお友達がいらっしゃいました。そのお友達に伺いましたら、「どういうふうに人の声を聞くコツっていうのはあるんですか。私としては、周りの声がなかなかうまく聞くことができないんで

す。でも、よしお兄さんは、みんなの声をちゃんと聞いてくれている。人の声を聞くコツはありますか。」というご質問いただきました。

小林 よしひさ

何だろう。あまり意識したことはないんですが、でも、先ほど言った、「逆に自分のエネルギーを発散しすぎて聞こえていなかった」っていうことがありましたので、やはりちょっと落ち着いてみる、俯瞰で感じるっていうことができ、そうすると聞こえてきたっていう経験はあるので、あまり抽象的な言い方になってしまうんですが。

司会者

例えば、ずっと自分が喋るのではなくて一度止まってみるとか。

小林 よしひさ

私、おしゃべりな方でもないですし、あと人見知りなので、あとコミュ障だから、逆に気を使って話してくれる人の方が多いので、そうすると楽っていう。無理して喋らないってのはどうですか。

司会者

でも、無理をしないで喋るっていうのは大事だと思うんですね。結局、人の声を聞けなかったどうしようって自分でジレンマになってしまうときって、一回自分が止まって、ふっと見てみるといいのかもしれないですね。

じゃあ、せっかくなので、ちょっと皆さんからも、何かよしお兄さんに聞いてみたいとかあったら、どなたかいらっしゃいましたら、ぜひ。

小林 よしひさ

何でもいいですよ。

司会者

今日だって、よしお兄さんに会えるからって言って、よしお兄さんが画面から消えた瞬間に、我が家ではロスでしたっていう方も聞いておりますので。ぜひ何か聞いてみたいとかありましたら。

参加者

(挙手)

司会者

じゃあマイクをお持ちさせていただきましょう。何でも構いませんのでね。どんなことでもいいです。

小林 よしひさ

立っていただいてありがとうございます。

参加者

貴重なお話ありがとうございます。お話聞かせていただいて、特に、「チャンスっていうのはいつも訪れるわけじゃなくて、それが来たときにつかみ取れる実力が無いといけないんだ」という話が非常に印象的だったんですけれども、私自身、小学生の子どもと、今保育園の子ども2人おるんですけれども。子どもたちが大人になっていくにあたって、親としては、そういういろいろな経験を積ませてあげて、そういうチャンスが来たときに、自分自身の幸せのためにそのチャンスをつかみ取れるような大人になってほしいなというふうに思ったんですが、例えばですね、習い事一つにしても、本人がやっぱりやる気にならないと、なかなか続かなかつたりとかすると思うんです。だから、親が強制してそういう経験を積ませようと思って、なかなかうまくいかないというのが、僕も親として感じておるところなんですけれども、よしお兄さんも、今小学生になった娘さんがいらっしゃるという話を伺ったので、もし、小林家で何かそういう経験を積ませられるように、親が何かサポートをしているようなことがあれば、何か教えていただければと思います。

小林 よしひさ

ありがとうございます。確かに、子ども本人がやりたいって思わないと、なかなかそれって一つ壁が越えられないっていうのもすごく感じていて。子どもに経験をさせられるのはやはり親であるという、親が作った環境がものを言うと思うんですけども。ただ、なかなかその壁を越えるには難しいなというのも私自身も感じていて。で、一つ、自分の中で意識しているのは、自分がまずやってみるとか、背中を見せるという言い方かもしれないんですけども、自分も一緒に楽しんでみる、自分も一緒に体験してみるという、一緒にやるということをちょっと意識してやっています。あと、私の仕事がそういう仕事なので、例えば、体を動かすダンスを覚えるとかいうのも、結構、子供の目の前で練習したりしているので、そういった姿を見ると自ずと真似してやってみたりとか。あと、なんかスポーツ、例えば今、世界陸上が始まってますけども、本当、昨日まさに「走ってる」「早いね」というところから、「ちょっと外行って走るか」と言ったら「走る」と言って、とにかく走りに行ったりとか。

司会者

走ってみたりとか？

小林 よしひさ

走りに行きました、はい、途中から鬼ごっこになって、気がついたら葉っぱ拾っておままごとに変っちゃいましたけど。でも、やっぱり一緒に共にするっていうのが一ついいのかなと。その中から、そこに、その競技、そのスポーツ、そのいったものに興味を持たなかったとしても、その中の何か、例えばボールが良かったのか、走ることが良かったのか分からないんですが、少しずつそういう経験を積んでいくっていうことができたらいいいかなと思うので、我が家は、一応自らやってみるっていうのを意識してやっています。

司会者

ありがとうございます。今、遊びというね、お話がありましたけれど、番組を卒業されてからも、子ども遊び庁長官で、今大阪関西万博でも活躍されていらっしゃいますけれども、これからどのような活動を続けていかたいですか。

小林 よしひさ

そうですね。私自身体操のお兄さんというところからスタートはしているんですけども、「体操の指導者です」というよりは、子どもと一緒に遊ぶ近所のお兄さんぐらいの感覚なので、まさに遊び庁というのも、何かこう「遊び庁」って言うとしごいもんみたいな感じなんですけども、そういったことではなく、世界の遊びだったり、昔ながらの日本の遊びだったりものを伝承してみたりとか、あとは、遊びをどうやって子どもたちとやっていくのかっていうのを一緒に実践してみせたりとか。もちろん、指導者養成とかそういうのもやってるんですけども、何か「運動だ」「スポーツだ」というよりは、その根本にある勉強もそうなんですけども、やっぱり遊ぶこと・主体性のあることをどんどんと子どもたちに伝えていくっていう、そういったことを活動として、これからもやっていきたいなと思っています。

司会者

楽しみですね。でも、本当に遊びっていうのがね、いかに大事かっていうのがすごく思いますね。

小林 よしひさ

世の中言うんですけどね、じゃあどう大事なの、どうしたらいいのっていうのが分かってこないんで、そこも私もどんどんと研究していこうかなと思っています。

司会者

そうですね、この後の活躍もぜひ楽しみにしていただきたいと思います。これからの活躍が楽しみです。今日は小林よしひささんにいろいろお話を伺いました。ありがとうございました。

小林 よしひさ

ありがとうございました。